

農業・農民問題研究のために

——お礼に代えて——

来栖宗孝

はじめに

立命館大学国際言語文化研究所編・刊『立命館言語文化研究』（第20巻1号～4号，2008年～9年）をご恵贈下さいまして、恐縮いたしますとともにまことにありがたく御礼申し上げます。

西川長夫教授から来栖宛に本研究書を送るよう依頼があったと記されてありました。私は、西川教授とお付き合いはありませんが、教授のたくさんの業績のうち特にフランス革命に関する著作及び論文をかなり拝読しており、多くの示唆を与えられましたことを感謝しております。

私が付度いたしますに、研究書において4号継続して、「二〇〇八年プロジェクトB4研究」である戦後の農民運動研究に依るのではないかということです。

それに加えて、研究書をいただくまで忘れておりましたが、2007年6月3日、早稲田大学内の一施設で行われました「松下清雄を語る会」に旧友いidemもの慇懃により出席して、少しばかりしゃべったことを想起いたしました。その縁由で私に研究書が贈られたのではないかと、感謝申し上げる次第です。

農民運動に関する四つの研究を拝見して、いくつかの感想が湧出してまいります。お礼に代えてこれらを記すことをお許しいただきたい。（順不同）

1. 東大細胞内リンチ事件について

1951年2月の厳冬期に発生した日本共産党（以下、日共）東京大学（当時、国際派）細胞における「スパイ嫌疑者」に対するリンチ事件のことです。

リンチの対象となったのは、細胞幹部の戸塚秀夫（キャップ）、高沢寅雄（都学連委員長）、不破哲三（上田健二郎の党名）の三人で、査問を命じ暴力を容認したのは東大細胞の公的指導部のさらに上にある秘密指導部（E.C.=executive committee：東大細胞員も知らなかった）の武井昭夫（全学連委員長）、力石貞一でした。

このリンチ事件に参加したメンバーのなかの、安東仁兵衛氏（故人）（『現代の理論』編集長）と小島晋治氏（東大名誉教授）両氏は、私の（旧制）高校・大学の後輩に当たるため、かなり詳しく当時の模様を伺っております。スパイと目された戸塚・高沢・不破三氏に暴力を揮いながら、彼の母の日誌が証拠となって三人のアリバイを逆に立証することになった安東氏（同著『戦後日本共産党私記』に詳しい）、そのため細胞総会では決定ができず再審議となり、それまで不破の身柄を「軟禁」するため、茨城県古河市の自宅に彼を預かった小島氏それぞれの話及び当時の東大細胞のいわば「同窓会」（一九会）の出した「一九会誌」（第一～六集、第六集で終結）

もいただいたことにより、リンチ事件はよく承知することができました。「一九会誌」は、テーマをこのリンチ事件に絞って編纂されております。

(これに対し「早稲田一九五〇年記録の会」は、東大細胞リンチ事件に留まらぬ広範な早稲田大学の学生運動の資料と証言を蒐集した全五巻の労作である。)

この事件は、東大哲学科の学生と自称していたオマタ（小俣）という男が、早稲田大学の学生運動の活動家達が集まっていた飲屋に加わり、しきりに話を聞き出そうとしていることから胡散臭く感じられ、早大細胞に追求されたところスパイであることを自供したことから始まります。

小俣は、東大細胞の戸塚・高沢・不破の三人はスパイである、さらに早大では吉田嘉清がスパイであると自供、東大の三人と秘密に会合してスパイ活動を打ち合わせたと「自白」したのです。

これを知った早大細胞キャップの松下清雄が驚いて全学連中央執行委員長武井昭夫に急報します。かくて、東大細胞の秘密指導部の武井と力石が細胞を集め査問を命じたのです。査問は嫌疑を受けた三人の行動につき証拠を集めることなく、スパイの自供を強要するばかりのため、撲る蹴るの暴力沙汰に陥ってしまったのです。

このスパイ・リンチ事件は、1933年（昭和8年）の日共中央部の宮本顕治・逸見重雄・秋笹政之輔・袴田里見による小畑達夫・大泉兼蔵両中央委員に対するスパイ・リンチ事件の戦後版ともいうべき類似したものでした。しかも、東大事件の指導部武井は党中央（国際派）の宮本に直属していたという縁があります。

東大細胞内リンチ事件は、結果として三人はスパイではないとされましたが、その間戸塚が自殺未遂を起こす騒ぎも加わりました。

この事件によって、東大細胞は壊滅してしまったのです。

「一九会」の記録では、当時戸塚・不破が本郷本富士警察にアルバイトとして入り、翻訳に従事していたことに触れてはおりますが、これに対しては追求しておりません。

私個人はそれでは不十分であると考えます。警察署にアルバイトで入る、さらに理屈をつければ警察の動きを探るといことは差しつかえないことです。しかし、そのアルバイトする者が党組織の公然たるメンバー、しかも幹部であることは両立するものではありません。このことに関する限り、戦後の日共、特に学生党員は合法ボケ、「平和革命」ボケに陥っていたといわざるをえないのです。

リンチを行かせた指導部のうち、武井は現在にいたっても本件の自己批判をしておりません。彼は「最後のポリシェヴィキ」(の一人)でありますから、およそ自己批判・反省とは縁がありません。1956年10月のハンガリア動乱事件、1968年8月のチェコスロヴァキアの「人間の顔をした社会主義」推進に対するソヴィエト赤軍の戦車数千台の投入による弾圧についても武井は支持するという迷妄を続けております。当時から「ヒステリー武井」という渾名どおり、リンチ事件は彼のヒステリーの所作でありました¹⁾。

力石は一応戸塚に謝罪はしましたが、後者は心から宥恕しているわけではなく、前者も心から悔いているわけではありません。力石は早熟の秀才でしたが、学者として大きな業績をあげませんでした。

被害者側の戸塚は、研究室に残り後に東大社会科学研究所教授となりました。

高沢は、社会党に入り国会議員に連続当選し、同党副委員長になりましたが物故いたしました。

不破は、リンチを受けてからは国際派から主流派に復帰し、宮本顕治の寵を得て抜擢され、最後に党のナンバー・ワンになりました。これは、宮本直系だった武井が党から離れた後、文藝評論家になったことと較べ歴史の皮肉であります。不破は、新潮社から自伝を出しましたが、リンチ事件については一言も触れておりません。

スパイ小侯は、早大細胞の指導者吉田をもスパイと自供しましたが細胞はこれによって動揺せず、吉田スパイ説を斥けております。

一説によると、スパイ小侯は官憲のスパイではなく、当時大分裂して抗争・非難し合っていた一方の「主流派」が、「国際派」が断然多く、強かった学生細胞を切り崩すために利用したのだ、といわれております。しかし、その後の小侯は行方不明で真相は明らかではありません。

このリンチ事件に、小侯の偽りの証言をストレートに東大細胞に通知した松下清雄は、凄惨冷酷なリンチ現場に立ち会っており、それだけ早大側で十分な小侯調査を行わなかったこと反省も加わり、一生自己の責任を一身に背負い苦しみつづけました。彼は、一言も弁解もせず沈黙を守ったため誤解を受けました。

今回、死を前にしての彼の「手記」が公表されました。（『立命館言語文化研究』20巻3号、2009年1月、214～216ページ）これによって、松下に対する誤解を解くことになりました。松下清雄、安らかに眠れ！

小島晋治教授に、上記松下告白文の写しを送りましたところ次の返事をいただきました。2009年1月9日、元東大細胞の「同窓会」一九会の解散会が行われ、30数人が参加しました。そのなかには、リンチを受けた戸塚元東大教授、故高沢社会党副委員長のご息女、元早大細胞から吉田氏ら3人が含まれます。

スパイ小侯の自供を松下に通告した畠中稔美や松下の話が出されました。

2. 松下清雄著『三つ目のアマンジャク』について

私は、文学音痴でありますからこの大部の大作の批判はできません。

方法として、主人公は閉塞した農村内部で何とかしたいと努力し、それを背後にあって冷たく看視する「オレめ」が冷笑・批判するという設定を採り、中身は、言葉の氾濫・洪水、農村に棲むデーモン（Dämon）の絶叫咆哮という大幻想小説・大怪奇小説です。

これは、素人では手に負えず専門家の解説による援助が必要です。フランソワ・ラブレの「ガ
ルガンチュア」的な痛快・享楽、抱腹絶倒がなく、あまりにも郷愁、あまりにも回想、あまり

にも後向き、あまりにも閉塞的です。

日本農業・農村における土地改革がほぼ成功裡に遂行された後、農民運動は停滞し、農民組合組織は崩壊してしまいました。独占資本が農業及び農村を包摂・支配してしまった現状に基づく農業問題の再考が必要です。

農業技術問題、これと直結する農業経営規模拡大問題、農民のもっとも不得意な共同経営問題、農業物価問題、生産者・消費者直結問題、これらを強制する国際的農業自由化問題等につき、一歩でも半歩でも出発する展望の欠如を改めて痛感させる悲愴な小説です。現代農村版平家物語です。

松下の遺作「草青火」も拝見いたしました。感想は変わりませんでした。既述のとおり私は文学音痴でありますから、松下の作品について批判・評価は慎むことにします。

3. 山口武秀について

農民運動史の研究（の一環）としての松下清雄の業績研究を追跡するにつれ、むしろ本筋は松下が一時期その下で農民オルグをしていた、常東農民組合一常東農民総協会の「天皇」山口武秀の全体的研究であろうと私は考えております。一連の松下清雄の研究に対する追補として述べさせていただきます。

山口武秀を生んだ茨城県鹿行地区の特質から始めます。

茨城県の東南部、太平洋に面する海岸地帯及び霞ヶ浦・北浦と県南端を流れる利根川に囲まれた地帯（河口の波崎町に達するまで）の鹿行地区（鹿島郡と行方郡）は、古来常陸風土記に登場する鹿島神宮のある古い土地柄です。

ただ、これら四つ（太平洋、霞ヶ浦、北浦、利根川）に囲まれ分断された地政学的制約から、孤立・閉鎖・後進の農漁村地帯でありました。しかし、米・麦・甘藷をはじめとする農産物及び魚介類の豊富な産地であります。

政治的には、霞ヶ浦の西端に位置する地方中心都市土浦市を本拠とする本間憲一郎を党首とする右翼団体から発信され刺激を受けた右翼運動「勤皇まことむすび」の地盤でありました。（しかしながら、昭和初期以降日本を騒がせた、大洗町に蟠居する井上日昭の血盟団及び水戸市の豪農愛郷塾の塾頭橘孝三郎らの影響は、土地の孤立・閉鎖のためそれほど及んではおりませんでした。）

カール・マルクス名著『ルイ・ボナパルトの「ブリュメール一八日」』が明解に指摘しておりますとおり、農民は経営の孤立性・分散性、水利・用水の共同協力をしても時どき襲ってくる自然災害（台風・洪水、早魃・冷害）には対抗できず人力の限界を痛感させられ、そのため現世の苦難の救済を求めて神仏に頼り、現実政治においては強力な指導力を発揮してくれるであろう中心を、通常接したことのない君主に求め期待するものであります。これが右翼を生む庶民の心情であります。同時に、前近代の「共同体」は「自由・平等・友愛」の社会ではなく、地主・庄屋、大商家、網元の支配する社会であります。

そのため、一面に右翼的心情を、他面に農民闘争を生み出す必然性が絶えず作用しております。

鹿行地区の玉造町の旧家地主兼廻船問屋に1915年に生まれた山口武秀は、近くの県立鉾田中学に学び、東京の女子大に在学中の姉の影響で資本主義の矛盾を学びました。

すでに10歳代の後半から農民運動に飛び込み、全国農民組合の若手活動家として活躍、18歳時、千葉県農村争議に勝利して初陣で名を挙げました。

1933年、共産党に入党、何度も検挙・弾圧され転向します。根っからの農民運動家山口にとって党籍の有無、転向・非転向は問題でなく、いかにして農村現地に在って少しでも農民の利益になることをすればよいかという人生态度を貫きます。右翼社会民主主義と貶された社会大衆党に入って運動を継続、山口の創意か党の智慧か判りませんが、日中戦争中、前線兵士に慰問袋を送る官製運動が奨励されたとき、慰問袋の中に農家の生活の苦しさを訴える手紙を挿入することを指導します。

そのため懲役刑を受け敗戦直前満期釈放されました。彼は、憲兵に切り殺されることを恐れて外出時には鉄兜を冠っていたといいます。こうして1945年8月15日を迎えました。

山口は敗戦直後から近在の農村青年を糾合し活動を再開いたしました。これが、常東農民組合の基礎となりました。この農民組合は自ら日本農民組合（未結成）支部常東農組を名乗った先駆的存在となりました。「じょうとう」は、農民運動内部ではそれだけで固有名詞となりました。

常東農組は、全国で最大最強の農民組織として名を轟かせました。その活動ぶりは山口の処女作『旗は大地とともに』（1949年初版 [1969年増補改訂版]、三一書房）に生々躍動感をもって記されております。まさしく、「疾風怒濤」（Stürm und Drang）の時代でした。

常東の全盛時代（1946年～50年）には、傘下の諸郡（東茨城、西茨城、鹿島、行方）に2人宛のオルグを配置し、本部に山口と書記長が常駐するという配置でありました。農民組合で10人のオルグを擁した組織はどこにもありません。彼等は最低月に一度は本部に集合して、現地報告、闘争方針、宣傳・動員計画等を協議しては現場に散って行きます。

農民オルグは、労働組合の幹部及び事務職員と異なり、月給を支給されません。自らの力量と努力で組織を作り、固め、農民の支持を得て三度の食事を農家で振舞ってもらうのです。（松下清雄の記事で、後輩のオルグに支持者農民数十世帯の名簿を渡し、これがオルグらの唯一の財産だよと説法したこと。いいだももの談話のなかで、闘争を誤り支持を失うとこれまで酒食を提供してくれた農家がお茶だけ、さらに関係が冷えるとお茶も出さなくなるかといっていることは事実なのです。）

私は、常東地域に入ってこれらのオルグに接したとき、梁山泊^{たむろ}に屯した宋江以下の英雄豪傑の闘争ぶりとはこんなものだったのか、と思わせられたものでした。

山口は、「天皇」、「大将」、「親分」、「先生」と呼ばれており、まさに農民運動の織田信長でした。私個人は「武秀^{ぶしゅう}さん」と呼んでおりました。

運動の初期から全盛期にかけてこれら「股肱の臣」は、熾烈な土地闘争の第一線に荒武者として立ち、地主・暴力団の攻撃に負傷する者あり、負傷させたこともありでした。

白馬に乗って先頭に立ち、数百人の農民をしたがえて地主の邸宅を襲う颯爽とした武秀^{ぶしゅう}さんの姿は、桶狭間の決戦に臨む織田信長の姿を思わせました。

これらの闘士たちは、農地改革が実施され、自らは自営農（経済学にいう独立自営農ですが実態は「過小農」）になった後、それぞれの闘争歴を買われて町村会議員（議長）、農業協同組合の役員となります。山口自身、玉造町の農協長に推されました。

（新潟県の農民運動の闘士達は後年田中角栄の支持者となり後援会「越山会」の各支部の幹部になったことと同じです。）

学生出身のインテリ農村オルグも速い遅いの差はあれ、農民運動の停滞とともに常東から都会に戻りました。松下清雄、柴山健太郎、針谷明、安東仁兵衛、田山実等です。ただ一人、最後の、もっとも若い立命館大の五十里武^{いかり}だけが鹿島町に残りました。

「栄光の常東天皇」は孤高を保ちますが、「家来」は去って行きました。

1947年以降、「第二次農地改革法」が実施・実現されたため農民組織は崩壊し、農民運動はほとんどなくなりました。

農民は土地を獲得するため、守るためには生命を賭けて闘います。土地を獲得した後では、左翼の社共両党の掲げる社会主義（革命）は他人事、労働組合の仕事と傍観します。

ブルジョワ民主主義革命の中心課題は土地革命であり、これを労働者・農民が共同協力して闘いとるか、国家権力が国の危急と衰微を打開するため「上から」行うかによって、その後の国の、民族の行方が決まります。

私は、エンゲルスの「ドイツ農民戦争」、カウツキーの「農業問題」を読んでいたお蔭で、土地改革が完了した後は、農民は農産物と独占資本の農機具・肥料との価格差、いわゆる「シェーレ」(Scherre = 鉞状価格差)に苦しめられる。この問題と過小農という経済的弱者が生き抜くためには共同経営を何とかして実現させねばならない、これが今後の農民運動の課題であると考えておりました。

もちろん、農民運動の「の」の字も、経験もない私ですからこれはインテリの空論であることを承知しておりますから、山口天皇に傳えたのでした。

山口武秀は、日本の戦後の農地改革を、「マック（日本占領軍最高司令官マッカーサー元帥のこと）にしてやられた」、「マックに先きを越された」、「これで日本における革命のチャンスはなくなった」と考えておりました。彼は、今後の農地闘争は対独占資本闘争であると明確に規定します。これ以後が、彼の農民運動の第二期です（1950～62年）。

農産物価格維持及び引上げ闘争、営農資金獲得闘争、税金闘争等です。土地改革は不徹底、みせかけの土地改革、地主制度は温存されたなど、土地闘争にしがみつ়く日共との乖離は確実です。山口は日共から除名されましたが意に介しませんでした。

1955年7月の日共第六回全国協議会后、日共は山口に謝罪いたしました。いい恥さらしでした。

山口の晩年は、市民運動指導者として活躍しますが農民運動とは別問題ですから割愛します。彼は1992年8月、心不全のために死亡いたしました。享年77歳でした。

私が、山口を高く評価する理由の一つに、闘争の（一応の）終結後に彼が必らず総括文書を論文の形で遺したことがあります。

農民運動家に珍しく彼は実に多くの著作、論文、手記、雑文を遺しております。「山口武秀著作集・大衆運動の原点」（1993年、三一書房）（733～740ページ）によると著作18冊、共著21冊、論文、対談、座談会等多数です。私は、彼から著作（単行本）をその都度戴いたことを心から感謝し、また、敬意を抱いております²⁾。

4. 鹿島工業団地開発・建設大事業と五十里武について

日本の農民組合が衰微し解体されて行くことと逆比例して、日本の高度経済成長期に、鹿島とその南の神栖村（戦時中、海軍航空隊が置かれていたことぐらいしか知られていない）との間に「鹿島臨海工業開発大団地」が建設され風土が一変してしまいました。（1960年～70年において）

常東のオルグ柴山健太郎、柴田友秋両氏は、茨城県の計画した水戸市の南部及び西部数村を含む渡里地区総合開発計画を知り、これを農民の利益となる開発とするため、立命館大学学生から常東に参加した五十里武を助手として活動を開始しました。その奮闘の経緯はお送りしました「労働運動研究」（2003年4月、復刊第4号）に出ております。

五十里武は、当時1950年前半の日共の武装闘争の一環として山村工作隊に派遣されその間に母親が死亡したのにも拘らず党はそのことを秘して本人に告げませんでした。この党の非人間性・非情に憤激した彼は脱党し、新天地を求めて常東に飛び込んできたのです。

渡里地区総合開発促進に成功した経験を生かし柴田・五十里の両名は国家的大開発事業である鹿島工業大団地開発建設の大事業に対応する仕事に取りかかりました。

1962年以降、山口武秀から独立した二人はまず、先輩の柴田が五十里を鹿島町役場に斡旋・就職させます。

当時の鹿島町長は、この開発大事業に反対でした。農民の土地問題、工業建設にひどい公害・環境汚染を必然に伴うからです。

ところが、その対策を樹てるうち当時の茨城県知事岩上二郎が、四日市市の経験を学び工業建設と公害予防対策とを併行して進めることを決意いたしました。公害都市第一号といわれた四日市は、市長加藤寛嗣の六期二四年の市政の間に公害克服に成功したからです。この経験を岩上知事は活用したのです。（加藤市長は、私の旧制高校、大学の同期生です）

単なる反対ではなく、工業建設に公害事前予防対策を織り込んだ壮大なプロジェクトは高度経済成長期であったため成功したのでありましょう。

この大計画が実施・完成してゆく間に、五十里の才能は十二分に発揮され三十数年後に彼は鹿島町長（後に市長）にまで昇りつめました。

鹿島臨海工業大団地及び人工大港湾（地図に載るほどの規模）は完成・稼動しております。

五十里市長は、サッカー・チーム「鹿島アントラーズ」を住友資本から独立させ、サッカースタジアムを建設しました。「アントラーズ」はJ1リーグで優勝又は優勝候補を続けております。

彼の市長時代に、鹿島から太平洋岸沿いに北進して県庁所在水戸市に直通する鉄道が完成さ

れました。これまで鹿行地区へは、水戸から常磐線上り列車で石岡下車、支線鹿島鉄道に乗替え終点鉾田で下車、さらに南に徒歩か馬車（後年バスで）行かねばならぬ交通不便な地域でした。（霞ヶ浦、北浦が邪魔をしておりました）鹿行は様相を一変したのです。

農民運動の英雄山口武秀は歴史上の人物となりましたが、農民運動の衰退とともに忘れられて行きます。山口時代末期の「家来」（しがない）農民オルグから五十里は、日本資本主義発展の一表象となる人物に成長いたしました。

この皮肉な「歴史の弁証法」を貴研究所が研究テーマとして採り上げて下されば、たいへんありがたいことです。

鹿島工業大団地開発と公害発生予防（その一つとしての犯罪予防を含む）について、法労総合研究所が5回に亘り同所「研究紀要」に発表しております。私もそのお手伝いをいたしました。

5. 吉田嘉清氏の発言の訂正

貴研究誌「言語文化研究」（20巻3号、2009年2月）231ページ、17～8行の吉田嘉清氏の発言、「水戸にいた遠坂寛なんかは「在日」で国籍を取ったんでしょ。」は正しくありません。

水戸に居たのは、戦後日共の茨城県組織再建に当たった遠坂良一³⁾です。

遠坂良一は、戦前は全農全会派（全国農民組合全国会議派、全会派は左派）、党では農民部に属し、戦後作家となった般若豊（ペンネーム^{はんやゆたか}堀谷雄高として大作「死霊」を著す）の部下でした。

私は、茨城県教職員組合執行委員会書記長として1947年2月1日闘争に参加、1948年秋、遠坂良一に強引に引抜かれて日共県委員会事務局長をさせられました。「事務局長」ポストは党規約にありません。県委員会の常住委員達は、戦前からの農民運動の古強者、労働関係は「全協」最後の委員長石上長寿、執行委員野村武秀等の長老でした。

いずれも古強者ですが、事務処理がさっぱりだめで遠坂委員長が困って、私に事務整理・処理をやらせたのです。ずっと裏方をつとめておりました関係で党内の諸問題・諸事情・人間関係を覚えたのでした。

1950年の党分裂に際し、代々木中央の意見に反対したため除名されました。

吉田氏のいう遠坂寛は、遠坂良一の夫人の妹の夫、遠坂姓を採って遠坂寛と名乗ったのです。本名、崔斗煥です。

遠坂寛は戦前からの運動家で優れた組織者です。1947年、党第6回大会選出中央委員ですから義兄良一より党内地位は高いことになります。戦後の長野県委員長として、同県から林百郎、高倉テル2人の国会議員を当選させました。この功により中央委員に選出されたのでしょ。

朝鮮戦争中、金日成が在日朝鮮人は朝鮮労働党員になれば「指令」したため、日共はこれ幸いと朝鮮人・韓国人党員を全部党から外してしまいました。朝鮮戦争中、朝鮮人は祖国防衛隊を組織して闘争の最前線に立って激しく闘ったため、多数の検挙者、犠牲者を出したにも拘らず日共は朝鮮人党員の貢献を認めようとしませんでした。

遠坂寛（崔斗煥）の長男が崔洋一です。彼は映画監督として「月はどっちに出ているか」という名作を作り、その年の各種映画賞をまとめて取りました。遠坂良一の死後、独り暮らしの夫人を見舞ったとき、甥が映画賞をたくさんとったと喜んで説明してくれました。

寛（崔斗煥）は自動車事故で亡くなりました。良一夫人は老人ホームに入りましたが死亡いたしました。崔洋一は、近ごろテレビジョンにも出て活躍しております。

遠坂良一死後、彼によって育てられ県委員にまで抜擢された青年党員達は、彼が中国寄りの立場を採ったため宮本顕治に除名され、「敵」となったためか、遠坂夫人の面倒をみようともしませんでした。人情、紙の如し、が共産党の情ないところです。

吉田嘉清氏の遠坂寛に関する発言部分についての訂正をさせていただきました。

注

- 1) 大池文雄著「水戸 Kommunists の系譜」（2009年、ペリかん社）で、武井の戸塚に対する攻撃の動機を記している。170～173ページ。しかし、私は個人の行動の動機を、個人心理的、フロイト的解釈に求めることに重点を置く立場を採らない。
- 2) 「労働運動研究」（1993年12月号、No.290）所載の拙文及び不二出版刊「マイクロフィルム版『戦後日本共産党関係資料』解題・解説」の拙稿を贈ります。農業・農民問題に関する私見を披瀝しております。
- 3) 1947年、党第6回大会選出中央委員候補、茨城県委員長、1950年、東京都委員長、「国際派」とされ除名。